

【亥親子置物】

米長 朝喜

来年の干支である亥を黒曜石で表現しました。立ち姿の親と、座り姿の子で一对の置物です。美しい黒曜石に出会い、威厳があり猪突猛進な亥の姿が浮かんで来て出来上がった作品です。制作は約一ヶ月。天然石は同じ種類でも一つひとつ表情が異なるため、大きな一つの石から親子として二頭を作り出しました。研磨の技術を使って、毛並みや生き活きとした表情、そして生きているような躍動感を表現しています。石は自然の物だから削っているうちに模様や空洞が出て来たりもしますが、それを味や風合いとしていかに表現するかが腕の見せ所です。

亥親子置物

いのししおやこおきもの

〔サイズ〕 親：縦150mm × 横50mm × 高70mm
子：縦 90mm × 横40mm × 高50mm

〔素 材〕 黒曜石



伝統工芸士・やまなしの名工

米長 朝喜

Vol. 13

2018年3月発行

craftsman jewelry file.13
tomoki yonenaga
2018 March

craftsman jewelry



山梨ジュエリーミュージアム

山梨県甲府市丸の内1-6-1 山梨県防災新館1階

<http://www.pref.yamanashi.jp/yjm/>

開館時間：10:00~17:30(最終入館17:00)

休館日：火曜日(祝日の場合はその翌日)、年末年始、
その他、臨時に開館・休館することがあります。

入館料：無料

駐車場：92台 山梨県防災新館地下有料駐車場(来館者は1時間無料)



水晶彫刻との 出会いと歩み

中学生の頃、美術展の手伝いをした事がきっかけで中学卒業後に故宅間正一先生の水晶彫刻工房へ就職。師匠がデザインをし、弟子たちが指示を受けて作品を制作していました。

茶器や香炉、花器、置物など様々な作品を制作しながら「石には石のやり方がある」と教わり、たくさんの技法を学びました。

今では珍しい沈み式と言う方法で襖に石をはめ込んで装飾する襖絵を経師屋さんと一緒に制作した事もありました。兄弟弟子は10人程いましたが、元々は家内工業の



ため、その多くは住み込みでした。私も7年間住み込み、通いで3年間、計10年間勤めました。

独立後は60年以上現役として働 きながら、技術が認められ伝統工芸士ややまなしの名工へも認定されました。平成24年には瑞宝単光章を授与され、その時には皇居にお招きいただき天皇后両陛下にもお会いしました。81歳の現在も現役として制作を続けています。

心に刻んだ 師匠の言葉と、 石と向き合う心

修業時代、師匠には「石には、なりたがっている物があるんだよ」と何度も言われました。いくら自分の作りたい物が頭の中にあっても、それに合う石と出会わなければダメなんです。

今では長い間の経験から石を見れば何を作るかがイメージできるようになりましたが、逆に「こういう物を作るから」といって石を捜すのは本当に難しい。全ては石との出会いで決まるんです。

また師匠は動物園で粘土でスケッチの講習会をよくしていましたが、紙の上のスケッチと粘土での



米長 朝喜(よねなが ともしき)

伝統工芸士
やまなしの名工
平成24年 瑞宝単光章授与

南巨摩郡富士川町天神中条862-3
Tel : 0556-22-0885
携帯 : 090-4660-2515

伝統技術を今に伝える名工。 師の言葉を胸に、石と共に歩む。



スケッチを両方するんです。中学生の時から絵が好きだったので風景画はよく描いていましたが、これは新鮮でした。今でも制作の前には絵を描いて、粘土で実物大に作っていますし、旅行に行っても石や造形物が気になるようになり、帰りの車の中ではスケッチに起こしています。写真を撮るように頭に浮かんでくる物を描き留め、お土産を買おうように、その土地の職人の技に触れるのが楽しみなんです。

自然と向き合い、石と向き合い、そういう目線で物を見る。こうした積み重ねが次の作品へ繋がっているんです。蒔いた種は芽が出るまで時間がかかるもの。自分もそうだったように師匠に教わった事も、その意味を本当に理解できるまで

には何年もかかりました。だからこそ若い人達にも、私が教わった事を伝え、それを活かしてくれたいと思います。

次世代へ託す 伝統技術と 思い

2017年の春まで5年間程、山梨県立宝石美術専門学校で非常勤講師として水晶彫刻の授業を受け持っていました。

それまでは金属を削る彫金の授業だけだったのですが、私が教えるという事で研磨の機械を導入してもらい立体物を作れるようにな

りました。教えたのはバラやポタンなどの植物のモチーフを作ったり、インタリオという沈み彫りの技法で柄を描き出す技法です。

研磨の作業では削る物にあわせて使う砂の割合も変わってくるのですが、そういった細かい事から、自分のデザインを石でどう表現するか、石の塊から立体物を削り出し作品として完成させるには、どういう工程を辿るのか。それらを経験する事で、ものづくりの視点も養ってもらったのです。

また山梨の宝飾の歴史の講義も加わり、学校として研磨技術授業の基礎が出来上がりました。そしてそれまでの2年制では技術の習得には短いという事で3年制へと変更され、私の引退した今も彫刻

の授業は続いています。全国から集まった生徒の多くは卒業後は地元へ帰り県内外へ就職していきます。

一人の職人を育てるのは難しいことですが、山梨の水晶研磨の技術を絶やさぬよう若い人達に伝えて行きたいです。



craftsman jewelry

vol.13

